

海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。



OVERSEAS

The Democratic Republic of Timor-Leste

— 東ティモール民主共和国 —

海外事情



驚きにはじまり、驚きとともに



小野寺 仁 ONODERA Hitoshi

パシフィックコンサルタンツ株式会社
国土基盤事業本部 港湾部 (旧所属：グローバルカンパニー)

はじめての訪問

東ティモール民主共和国をはじめて訪問したのは2020年2月のことでした。東京から首都ディリへの経由地であるデンパサール国際空港で、思いがけず「日本からの旅行客は搭乗できない」と搭乗を拒否されました。折しも世界的に新型コロナウイルスの感染が拡大しつつあり、日本でも感染者が確認されるなど、当たり前の日常が

変わり始めていた時期でした。このような日本のニュースはインドネシアにも届いていたようです。当時、東ティモール政府はまだ明確な入国拒否や国境閉鎖は行っていないでしたが、「念のために」と、JICA東ティモール事務所から事前に頂いていた渡航関係の書類を航空会社の搭乗カウンターで提示し、搭乗を認めてもらうよう交渉しました。しかし、答えは「No」。

当時は陰性を証明するPCR検査結果を持参するルールもなく、予想外の事態に慌てました。それでも、日本による東ティモール支援に向けた調査のための渡航だったので、簡単にはあきらめられませんでした。ほとんど面識のなかった他社の調査団員の皆さんと一緒に、東ティモール政府が国境を閉鎖していないこと、政府の要請に基づく調査目的の訪問であることを説明し、何とかディリ行きのために搭乗することができました。無事にディリのプレジデンテ・ニコラウ・ロバト国際空港に降り立った時には、心からほっとしました。

人懐っこく優しい人たち

東ティモールは、2002年5月20日に正式に独立した21世紀最初の独立国であり、アジアで最も若い国として知られています。2025年10月には念願のASEAN加盟も果たしました。身近なところでは、コーヒーの産地の一つとして、近年、日本でも親しまれています。

総人口は約140万人、年齢の中央値は22歳で約6割が25歳以下



写真1 ディリ港



写真2 フットサルを楽しむ仲間たち

と、世界的にも若い人が多い国の一つです。国土面積は約1万5千km²で、岩手県と同じくらいの広さです。ディリおよびその近郊には、人口の約1/4の約35万人の人々が暮らしており、人口の一極集中が進んでいます。若者の実質的な失業率は40~50%とも言われています。国内に十分な働き口がないため、東ティモール政府の政策的な後押しも相まって、オーストラリアや韓国、ポルトガルなどへ出稼ぎに行く若者も多いようです。

港湾調査のカウンターパートとして関わる東ティモール港湾公社 (APORTIL) の職員も、その多くが若者です。好奇心が旺盛で、新しいことを学びたいという意欲が感じられる一方、どこかのんびりした雰囲気もあります。ディリにも、若者が遊べるようなアミューズメント施設はあまりありませんが、週末の夜には友人たちとフットサルを楽しんでいます。一度、練習試合に参加させていただきましたが、年齢の差を痛感しました。人懐っこく、優しく、素直で、仕事も遊びも一緒に楽しめる人たちです。

驚きの連続の南部

東ティモールの全国港湾マス



写真3 山間部でモノとヒトを運ぶトラック

タープランを策定するために、APORTILが所管するディリ港や飛び地のオエクシ港、ディリの対岸の離島にあるアタウロ港をはじめとする16港と当時PPP事業として開発中だったティバル港、民間のセメント栈橋やオイル栈橋など国内の全ての港を訪問しました。ディリ港とオエクシ港は日本の無償資金協力により整備され、今も人々の暮らしを支えています。1週間の行程で実施した現地踏査では、陸路でディリから南部のスパイへ向かい、南部沿岸地域を横断

して東部のコムへ進み、そこから北部沿岸を通過してディリに戻り、全国の港湾の状況を確認しました。オエクシを除く東ティモールは、直線距離では東西方向に約260km、南北方向に約90kmと東西に細長い国です。ディリから南部のスパイへ向かうルート上には、標高1,500m級の中央山脈があり、道のりは直線距離の約2倍の約170kmにもなります。実際に移動してみると、途中の休憩時間を除いても移動に5時間以上かかり、日本で暮らしている時の距離感や時

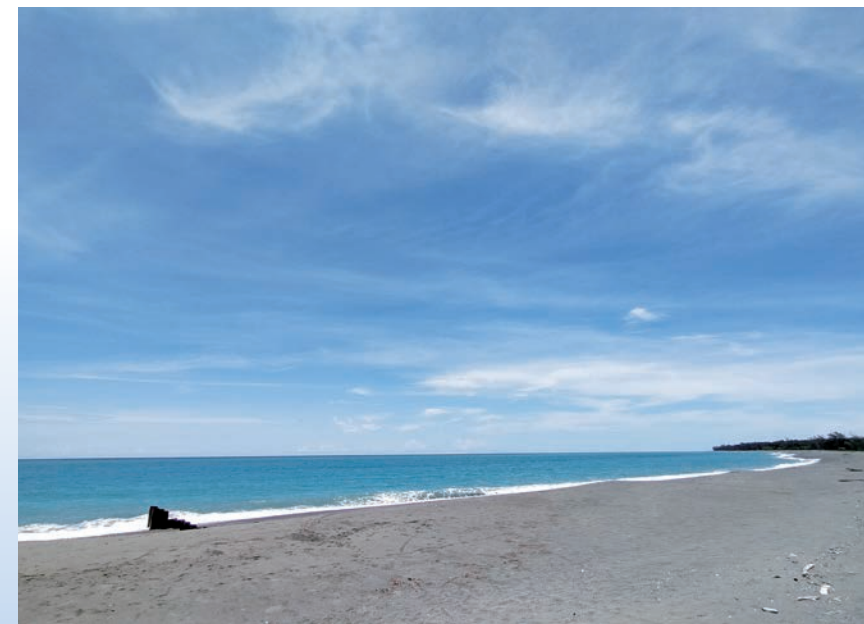


写真4 南部の港



写真5 山間部の市場

間感覚との違いに驚かされました。またAPORTIL職員に港を紹介してもらっても、目の前に広がっているのは海と砂浜。これは予想もしない光景でした。「そうか、これから港を造って発展していくんだな」と、国内の港湾業務では経験したことのない、グリーンフィールドの仕事に参加している実感が湧きました。翌日から巡った南部沿岸も未舗装区間があり、走行距離と実際にかかる時間との差に再び驚きました。雨季には、山間部で土砂

崩れや道路の冠水により、一時的に通行できなくなることもあると聞いていましたが、南部のロレに向かう途中の橋が壊れて通行できないと聞き、これには参りました。乾季であれば川底を横断して移動できるのですが、あいにく雨季で河川が増水していたため、ルートを変更し、北部の第二の都市バウカウへ向かうことになりました。その途中で、初めて青年海外協力隊の方にお会いしました。現地の小学校でサッカーを教えているとの

ことでした。地方に暮らしながら子どもたちにサッカーを教えているその若者の笑顔がとても輝いていて、感動したことを今でも覚えています。

ディリでの生活

東ティモールでは、通貨価値の安定化を図るため、法定通貨として米ドルが使われています。1ドル以下の通貨は、センタボ(Centavos)という独自の硬貨が使われており、現在もポルトガルの国立造幣局で作られているそうです。地元の小売店では、お釣りが足りない時に、代わりに飴玉をくれることがあります。最初は戸惑いましたが、今では現地の微笑ましい光景の一つだと感じています。地元のスーパーマーケットもあり、日用品の調達に困ることはありません。賞味期限切れ間近の日本食が販売されているスーパーもあります。賞味期限が切れている場合は、無料でもらえることもあると聞きました。ディリ市内には、ポルトガル料理やインドネシア料理をはじめ、中華料理、インド料理、タイ料理、韓国料理などさまざまなレストランがあります。一時期は日



写真8 アタウロ島の朝



写真9 現在のカラベラ港

本人オーナーの日本料理店もありましたが、残念ながら現在は廃業してしまったようです。当時は通信状況が非常に悪く、IMB以下のメールの添付ファイルのダウンロードにも苦労しましたが、最近はかなり改善されて、以前より仕事がしやすくなりました。

さまざまなサンゴ礁が広がる豊かな海と満天の星空

東ティモールは、地球上で最も海洋生物の多様性が高いコーラル・トライアングルの南端に位置しています。初めて東ティモールの北部沿岸でダイビングをした際、透明度の高い海と、そこに広がるサンゴ礁の種類の多さに圧倒され

ました。対岸のアタウロ島や東部のジャコ島にも、多様なサンゴ礁や熱帯魚が生息しており、シュノーケリングでも十分にその美しさを堪能できます。アタウロ島はサンゴ礁に住む魚の多様性で世界一となった記録を持ち、また世界の持続可能な観光地トップ100にも選出されたことがあるそうです。夜には満天の星空が広がり、南十字星や圧倒的なスケールの天の川を見ることができます。

おわりに

東ティモール(Timor-Leste)という国名の“Timor”はマレー語で「東」を、“Leste”はポルトガル語で「東」を意味し、「ティモール島の東側にある国」という地理的な特徴を表しています。まさに「東の東端」にあるこの国は、アジアでも観光客の少ない国の一つです。いつかこの手付かずの自然や秘境のような魅力が広く注目される日が来ると信じています。そして、自然や地元の文化・伝統を守りながら、画一的ではない観光地として発展していくことを期待しています。東ティモールとの関わりは、想定外の事態からはじまり、その後も驚かされることの連続でした。港湾の詳細計画策定調査の段階から、全国港湾マスタープラン調査、第二の都市バウカウ近郊のカラベラ港の計画準備調査まで、足掛け7年にわたり調査に携わってきました。今ではすっかり思い入れのある国となった東ティモールで、これからは港湾整備を通じて、地方に暮らす人々の生活や、この国の今後の成長に少しでも貢献できるよう、引き続き取り組んでいきたいと思っています。

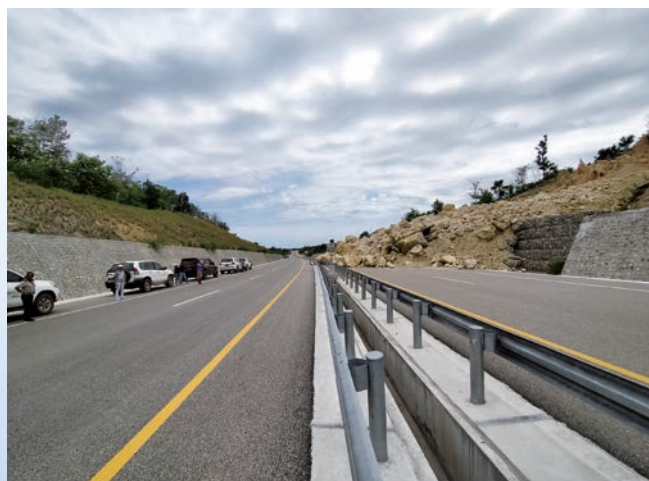


写真6 南部の斜面崩壊現場



写真7 南部の未舗装区間